

# 絵巻物の政治性を議論

## 美の裏に「権力の誇示」

華麗な絵と詞書で物語を紡ぐ絵巻物には、みやびやかなイメージが漂う。一方、歴史資料としてみれば、権力の誇示などのメッセージも浮かび上がる。そんな絵巻の政治性について、東京・上野の東京文化財研究所で3月、専門家が討議を行った。

武運の神・八幡神と同一とされる第15代応神天皇を描いた「八幡縁起絵巻」を取り上げた。母の神功皇后が朝鮮半島に攻め入る「三韓征伐」から、天皇の誕生、死後に神としてまつられる経緯などを描いた。中世以来の八幡信仰の広がり、絵



武者姿の神功皇后（画面中央左）に、新羅王がひざまずいて服従する「神功皇后縁起絵巻」の一場面＝重要文化財、菅田八幡宮蔵

巻も各地に残る。

「天皇の祖先で、12世紀以降は源氏の守護神にもなった八幡神は、対外的な危機に際して国家の守護神となった」。独ハイデルベルク大学のメラニー・トレイデ教授（中世日本美術）は、そう語る。八幡縁起絵巻の中で特に注目するのが、室町幕府の6代将軍足利義教が、15世紀前半に菅田八幡宮（大阪府羽曳野市）に奉納した「神功皇后縁起絵巻」（重要文化財）だ。

トレイデ教授は、幕府が弱体化し政争の渦中にもあった義教が、優れた絵巻の作成によって権威の復興を図ったと考える。かつて権勢を誇った藤原氏の氏神である奈良の春日大社を描いた「春日権現験記絵」を意識し、「八幡神＝源氏（足利氏）を春日神＝藤原氏なみに引き上げる意図があった」とみる。

力の誇示のための絵巻は「豊臣秀吉の朝鮮出兵、韓国併合など、外国との緊張関係が高まるたびに現れた」という。明治政府は神功皇后を紙幣や切手に使い、韓国併合の1910年、「神功皇后縁起絵巻」を国宝に指定した（戦後、重文に）。

トレイデ教授は、絵巻が今なお政治的な文脈で見られる例として5年前、米サンフランシスコの美術館での騒動を挙げた。三韓征伐を描いた別の絵巻の展示に対し、韓国系コミュニティから抗議の声が上がり、美術館が遺憾の意を表明したのだ。

討議に参加した津田徹英・東文研文化財アーカイブズ研究室長は「絵巻の美的な側面に注目がちだが、権力者が作らせる絵巻には政治的な意図がある。米国での騒動は、絵巻の持つそんな本質が、ゆがんだ形で表れたといえるかもしれない」と話した。

（小川雪）